

Translation Baffled : A Case of the First Two Paragraphs of Anne of Green Gables

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石木, 利明 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6359

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



原文の力— *Anne of Green Gables* (『赤毛のアン』) 冒頭に学ぶ

石 木 利 明

はじめに

「英語で読まなければダメでしょうか。」「翻訳でもいいですか。いや、いいですよ。」学生たちに英語の小説を紹介して勧めようとするとき、かなりの頻度でこう尋ねられ、たいていは「ダメとは言わないけれど……。まあ、翻訳でもいいから読んでごらん」と少し残念さをにじませた顔で歯切れの悪い返答をしてしまう。「翻訳でもいい」ということばの裏には、「英語の原文だったらもっといい」と言いたい気持ちが隠れているわけである。なぜ原文だったら「もっといい」のか、学生たちは説得されると面倒なことなることを恐れてか、それ以上深くは追求して来ない。こちらもその理由を説明して納得させようとするのは骨が折れそうなので、立ち話でやりたくはない。本稿は、そういう経緯であまり丁寧に説明してこなかった「原文はなぜ読む価値があるのか」という問題について、少し具体的に論じてみようという試みである。¹

題材として選んだのは、L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* (『赤毛のアン』, 1908年)の冒頭2つのパラグラフである。その理由はいくつもある。まず、本稿の読者のかなりが(翻訳で)読んだことがある—しかもその魅力に取り憑かれたはずの—作品であること。邦訳がいくつも試みられている(10種類を超える!)こと。²そして何より、この冒頭部分が文学的な修辞(rhetoric)³に満ち溢れた、凝りに凝った文体で書かれていること、つまり原文の魅力を語るのに実に相応しいものとなっていること、である。この部分の原文に施された表現の技の巧みを読み取りながら、なぜ翻訳ではなく原文を読むべきなのかについて論じてみたい。

原文にしつこく言及することになるので、まずはその原文をそのまま引用しておく。また、最初の記念碑的邦訳であり、しかもその魅力が今日でも色褪せることなく、発行部数においても人気においても他の翻訳を圧倒している村岡花子による翻訳を引用しておこう。

CHAPTER I. Mrs. Rachel Lynde is Surprised

Mrs. Rachel Lynde lived just where the Avonlea main road dipped down into a little hollow, fringed with alders and ladies' eardrops and traversed by a brook that had its source away back in the woods of the old Cuthbert place; it was reputed to be an **intricate, headlong brook** in its earlier course through those woods, with **dark secrets** of pool and cascade; but by the time it reached Lynde's Hollow it was a **quiet, well-conducted** little stream, for not even a brook could run past Mrs. Rachel Lynde's door without **due regard for decency and decorum**; it probably was **conscious** that Mrs. Rachel was sitting at her window, keeping a sharp eye on everything that passed, from brooks and children up, and that if she noticed anything odd or out of place she would never rest until she had ferreted out the whys and wherefores thereof.

There are plenty of people in Avonlea and out of it, who can attend closely to their neighbor's business by dint of neglecting their own; but Mrs. Rachel Lynde was one of those capable creatures who can manage their own concerns and those of other folks into the bargain. She was a notable housewife; her work was always done and well done; she "**ran**" the Sewing Circle, helped run the Sunday-school, and was the strongest prop of the Church Aid Society and Foreign Missions Auxiliary. Yet with all this Mrs. Rachel found abundant time to sit for hours at her kitchen window, knitting "cotton warp" quilts—she had knitted sixteen of them, as Avonlea housekeepers were wont to tell in awed voices—and keeping a sharp eye on the main road that crossed the hollow and wound up the steep red hill beyond. Since Avonlea occupied a little **triangular** peninsula jutting out into the Gulf of St. Lawrence with water on two sides of it, anybody who went out of it or into it had to pass over that hill road and so **run the unseen gauntlet** of Mrs. Rachel's **all-seeing eye**.

(ボールドは筆者による。本稿で問題にしている表現であることを示す。)

第一章 レイチェル・リンド夫人の驚き

アヴォンリーの街道をだらだらと下って行くと小さな窪地に出る。レ

イチェル・リンド夫人はここに住んでいた。まわりには、榛の木が茂り、釣浮草の花が咲き競い、ずっと奥の方のクスバート家の森から流れてくる小川がよこぎっていた。森の奥の上流の方には思いがけない淵や、滝などがある、かなりの急流だそうだが、レイチェル・リンド夫人の門口を通るときには、川の流れてさえも行儀作法に気をつけない訳にはいかないからである。リンド夫人が窓際にすわり、小川からこどもにいたるまで通行のもの全部にするどい監督の目を光らせていて、ちょっとでも腑におちない店やふつごうなところを見つけたが最後、その理由を根ほり葉ほり、さぐり出さずにはおかないということを、川の流れの方でもわきまえていたのかもしれない。

自分のことはそっちのけにして他人の世話ばかりやいている者は、アヴォンリーにかぎらずどこにもいくらでもいるが、レイチェル・リンド夫人は自分の始末はもちろんのこと、そのうえに、他人の世話までやくだけの腕前をもっていた。主婦としての手腕はたいしたもの、なんでも手際よく、人並み以上にやってのけた。裁縫の集いの中心ではあるし、日曜学校の経営から外国伝道夫人講演会の重鎮といったぐあいでありながら、しかもなお何時間でも台所の窓下にすわって、木綿のさしこのふとんをさす余力があった。「十六枚もつくったんだとき」とアヴォンリーの主婦たちは声をひそめて話し合うのだった。それもその間じゅう、この窪地からずっと向こうの赤い丘の急な斜面までうねうねと続いている街道のほうへ、たえず目をくばりながらの仕事だから驚きいったものである。アヴォンリーはセント・ローレンス湾につきでた三角形の小さな半島を占めており、両側に水をひかえているので、ここからは出て行く者も入ってくる者もかならずこの丘の道を越えなくてはならないので、しょせん、リンド夫人のぬけめのない監視をのがれることはできなかった。

村岡花子訳 (村岡美枝改定訳) 『赤毛のアン』 (新潮文庫)

1 喩えの妙

この物語で主人公 Anne Shirley が登場するのは第3章になってからである。作者は極めてユニークで魅力的なこの主人公の物語への導入を印象深いものとするために、2章を費やしてその舞台を入念に描き出そうとしている。

そこは Prince Edward 島の架空の町 Avonlea であるが、作者がまず語るのは、この町の包括的な特徴ではなく、町の主婦連を取り仕切っていると思しき Rachel Lynde 夫人なる人物個人のキャラクターである。

作者は、しかしながら、Rachel Lynde のキャラクターをいきなり直接的表現で説明し始めはしない。彼女がどんな人物かを語らせるのに作者が使うのは、彼女の家の前を流れる小川 (brook) の様子である。原文で用いられている語を添えながらこの部分を説明的に訳してみると、だいたい次のようになる。

Cuthbert 家所有の森の中、湧き出したばかりの頃は入り組んだ激しい流れの小川 (an intricate, headlong brook) は、淀み (pool) や小さな滝 (cascade) という暗い秘密 (dark secrets) を隠しているが、Lynde 夫人宅の前を流れる頃には、おとなしく行儀の良い小さな流れ (a quiet, well-conducted little stream) に変貌している。小川でさえ、礼儀作法 (decency and decorum) をきちんと重んじること (due respect) なく夫人宅の前を流れることは許されないからなのだ。小川もこの窓辺から投げられている鋭い視線を多分意識していた (conscious) のであろう。

このパラグラフを最後まで読んだおそらくすべての読者が気づくのは、小川があたかも人間であるかのように語られているということである。なにしろ、この川は、おっかないおばさんの見張りの目を「意識している」(conscious) というのだから。普通の注意深さをもった読者ならば、その前段、“quiet”, “well-conducted”, “decency and decorum”, “due respect” などという語によって語られる段階で、もうそれに気づいているはずだ。このように、人間でないものを人間であるかのように (人間的な性質を帯びているかのように) 表現する手法は「擬人法 (擬人化)」(personification, anthropomorphism) と呼ばれる。さらに注意深い読者の一部は、この川が「おとなしくなる」前、森の中を流れていた時の様子にも人の属性表現を見出さずにはいられない。人知れず隠れた淀みや滝が「心に隠した秘密」(dark secrets) と表されているのが同じ理由によるものだと気づくのである。であるならば、さらに読みの流れを遡りたくなるのが注意深い読者の習性の必然であろう。その前段の“an intricate, headlong brook”なる表現も実は擬人的表現なのではないのか

と考えたくなる。“intricate”も“headlong”も、人の性質を表す意味を重ね合わされているのではないか。

川が川として“intricate”で“headlong”であるとはどういうことで、同時に人としてはどういう性質を持つことになるのだろうか。もっとも頼りになる辞書である OED (*The Oxford English Dictionary*) を参照しながら考えてみよう。

まずは“headlong”から。OED では adjective (形容詞) 分類中の 3 番目で、“3. Rushing forward impetuously; wildly impetuous. Of actions or agents.” (猛烈な勢いで突き進む。動作についても動作主についても用いる) と定義され、用例の一つ“The rivers making way. . With headlong course into the sea profound.”が挙げられている。まさに「川」の流れの激しさを表すのに使われる形容詞だとわかる。と同時に、そのすぐ下、4 番目の定義として、“4. fig. Characterized by unrestrainable or ungoverned haste; precipitate, madly impetuous; rash, reckless. Of persons, their actions. etc.” (比喩的用法。抑えの効かないほど急いでいる様。猛烈な勢いの。性急な、向こう見ずな。人や人の行動などについて言う。) とある。人の「血の気の多い荒々しさ」を表すわけだ。

次に“intricate”。もちろん第 1 義は、“1. Perplexingly entangled or involved; interwinding in a complicated manner.” (わけがわからないほど絡み合った、込み入った。複雑にもつれた。) であるが、“2. Of thoughts, conceptions, statements, etc.: Perplexingly involved or complicated in meaning; entangled; obscure.” (思考、観念、陳述などについて、意味がもつれてはっきりわからない。曖昧である。) とあり、物理的ではないものの複雑さについても用いられることがわかる。源流に近いところで流れが“intricate”なのは、あちらこちらで湧き出たと思ったら再び木々の下生えに姿を隠したりして、一本のはっきりした水流として見えていない「複雑さ」を表すのだろう。OED に擬人的比喩表現の用例がないのは残念だが、人間的性質が“intricate”であるとは、「一筋縄では捉えられない、こんな人と単純に決めつけるのが難しい」といったところであろうか。

当然のことながら、すべての訳者はパラグラフ途中から最後にかけて、つまり川が変貌した後の擬人化を翻訳に反映させている。ところが、村岡訳を見ていただければわかるように、それ以前の川は「単純な川」・「川以外のも

のではない川」の扱いでしかない。他の訳者のほとんどすべてが村岡訳と変わらない中であって、山本史郎訳は、第1パラグラフにおける小川の擬人化を「最初から」きちんと訳出しようと努力している唯一の翻訳となっている。

この流れときたら、森の中にいる間はまるでひねくれ者のきかん坊で、やたらにうねうねと曲がりくねりながらながれてくる。しかも深い樹々の翳のあいだには、たくさんのほの暗い瀧や陰険な水たまりを、ひそめ隠しているというもっぱらのうわさだ。しかしリンド邸の谷間あたりにまできたとたんに、この荒くれ者はとても躰のよいせせらぎに変わってしまう。レイチェル夫人家の前を行きすぎるときには、小川ですらお行儀よくとり澄ましていなければならないのだろうか？そう、小川にだってちゃんとわかっている。(後略) (傍点筆者)

ここで山本は、“an intricate, headlong brook”を、大方の翻訳者のように「複雑な急流」と済ませず、「ひねくれ者のきかん坊」という訳語を与えている。これを思いついた時の訳者の「してやったり」という顔が想像できる。上手い訳である。山本はここからすでに擬人化が始まっており、だからそれを示す訳がどうしても必要だと判断したのである。

しかし、その山本訳も、原文の工夫を全て写し取るという点で完璧とは言い難いのである。なぜか。この部分の面白さは、次第に擬人化が色濃くなっていくという、まるであぶり出しのような＜漸次的開陳＞の技法にもあるのだ。最初は騙され、次にチラリ見せられ「おや」と気づき、だんだんくっきりした仕掛けの輪郭を見せられ「なるほど」と膝を打つ、「読みほぐれてゆく」流れの妙味がここには隠されている。川が流れ下り穏やかさを増すにつれてその仕掛けが見えてくる。であるから、「ほらほら人に喩えているんですよ」と最初から説明全開で擬人法をさらけ出してしまうのは、舞台上で演じられている手品の「タネと仕掛け」を逐一解説してくれる観客が隣にいるようなもので、興ざめなのである。

しかも、「ひねくれ者のきかん坊」は、“intricate”と“headlong”の比喩的意味しか表していない。比喩的意味を訳語として選択した途端、字義通り川の流れを表す意味のほうは、たいへん皮肉なことに、そこから滑り落ちる。ここで作者 Montgomery が選択した形容詞は、どれも字義通りの川の流れを表

す表現であると同時に人の性質を表す表現であり、同じ語がどちらにも読めるところに面白さが隠されている。この両方を同時に満たす日本語が与えられて初めて、擬人法の面白さが翻訳によっても写し取れたと言えるのである。

この第1パラグラフに作者が施した文体的工夫は、擬人法だけではない。このパラグラフのパンクチュエーション (punctuation) にも着目してほしい。途中3つのセミコロン (semicolon) が挿入されながらも、なんとパラグラフ全体がひとつのセンテンスで書かれている。ここでの「文のかたち」そのものが、森の中の源流から Lynde 家の窪地まで途切れぬ「流れ」の隠喩 (metaphor) となっている。センテンスの流れが川の流れの「隠れた喩え」として表現されているというわけだ。憎い仕掛けではないか。この原文の工夫を日本語訳に反映させるとしたら、最初の段落の途中には句点を入れない文章にならなければならないが、それはおそらく無理である。なぜなら、日本語にはセミコロンという読点と句点の中間的句読記号がないからである。

2 言葉遊びの面白さ／難しさ

第2パラグラフは、第1パラグラフの間接的な表現とは打って変わり、Rachel Lynde の共同体での八面六臂の活躍ぶりが畳み掛けるように列挙される。その一つが縫い物サークルのまとめ役をしていることであり、原文では“ran” the Sowing Circle”となっている。細部にこだわることなく読めば、どうということはなく読み流してしまうところかもしれない。この“run”が「運営する」という意味で使われていることは誰にもわかることだ。しかし目を凝らして読んでみると、その“ran”にはクォーテーション・マーク (quotation marks) がついていることに気づく。クォーテーション・マークはその名の由来のように何かを「引用する」際にその印として使われる他、その語を「際立たせる」ためにも使われる。「ここに注目せよ」というマーカーとしての使い方である。なにも言うべきものがないものに「注目せよ」と印をつけることはないという自明の理に引っかかると、にわかにこの部分が軽く読み流すことのできないものとなる。“ran”という語が目立ちたがっている特別な理由は何か。

「わたしに注目して」と“run”が訴えかけてくる。その意図を知るには、この語の素性を知らなければならない。ここでも頼りになるのはもちろん OED である。意を決し全 81 (!) に及ぶ“run”の動詞語義をブラウズしていくと、

その 41 番目, “41. a. To sew slightly and quickly, usually by taking a number of stitches on the needle at a time. (通常一度に多くの針目を作りちくちく素早く縫う)” という定義が見つかる。答えはこれである。これしかない。作者は、縫い物サークルを「運営していた」という “ran” に「縫っていた」という意味の “ran” を掛けているのである。縫い物サークルを「運営する」=「縫う」とは、Rachel Lynde のサークルのまとめ方の手腕がすばやい運針の技に喩えられているということであろう。

翻訳者たちはこの難問にどう取り組んでいるのだろうか。「裁縫の集いの中心ではあるし」(村岡), 「縫い物のあつまりを主催し」(林), 「裁縫の集まりを開き」(松本), 「“裁縫クラブ”を“やって”いた」(山本), 「村の裁縫の集いを文字どおり切りまわし」(掛川)。

「運営している」「やっている」「開いている」「主催している」のどれも「縫っている」という意味を同時にもつ表現ではない。ひょっとしてこれら翻訳者たちは、それに気づいていないのか。それとも気づいていながら手にあまる難問なので放置したのだろうか。原文にクォーテーション・マークがついているから日本語にも同じものをつけてお終いという山本訳には、小川の擬人化にこだわった時の冴えはない。唯一それを意識して挑戦してみたのかなとかすかに感じられるのが掛川訳である。裁縫サークルなだけに、「切りまわす」=「布を切る」と掛けてみようとしたのではないか。しかし、やはりここは「縫う」にこだわらなければ原文の言葉遊びを読者に伝えることはできない。

「縫い物サークルの面々を『縫い付ける』主催者となっていた」というようなかなか無理のある訳が訳として成立しなければ、この言葉遊びを翻訳で伝えることは難しい。そんなわざとらしい訳が原文のさりげなく軽いお遊びの軽妙洒脱を伝えることはない。たった2つのオタマジャクシのような記号が、翻訳を頓挫させる。翻訳の不可能性という悲しい挫折が、言葉遊びのような実に単純なおふざけ表現を通じて露わになるというのはなんとも皮肉なことではないだろうか。

3 イメージの力

最後に取り上げたいのは、原文の英語表現のもつイメージ喚起の力である。第2パラグラフの最後で、「地形上、Avonleaを訪れる者も出て行く者も、Rachel Lynde の家の前の街道を通らざるを得ない関係上、通行人たちは目に

は見えないけれども(家の窓の奥からから覗いているので)全てを見通すような彼女の厳しい視線にさらされることになる」という内容が語られているが、注目してもらいたいのはここで使われている“run the unseen gauntlet of Mrs Rachel’s all-seeing eye”という表現である。

“gauntlet”は“gantelope”とも綴られ、OEDによると“A military (occas. also naval) punishment in which the culprit had to run stripped to the waist between two rows of men who struck at him with a stick or a knotted cord. rare exc. in to †pass, run the gantelope.”である。両側に並んだ兵士たちの間を棒や鞭で打たれながら走らされる、なんとも残酷な「笞刑(ちけい)」である。



“running the gauntlet”⁴

これが比喩的に用いられ、“run the gautlet”は「厳しい批評を受ける、苦難にあう；難所を切り抜ける」(『ランダムハウス英和辞典』)という意味で使われる。各翻訳はもちろんその比喩的意味を採用して訳しているわけだ。

「リンド夫人のぬけめのない監視をのがれることはできなかった」(村岡)、「リンド夫人の鋭い詮索の目にさらされるはめになった」(林)、「ミセス・リンドのなにひとつ見逃さない監視の目にさらされる羽目になるのだ」(掛川)、「すべてを見通すリンド夫人の監視に、必ずさらされなければならなかった」(松本)など。

どの訳も“run the gauntlet”の意味を外していない。その通りなのである。そのような内容を原文は語ろうとし、どの訳もそれを正しく日本語に訳している。では、何が問題なのか。翻訳の日本語に「意味の正しさ」以外に不足しているもの、英語の表現にはあるのにそれを訳した日本語では失われてしまっているものは何かを考えてほしい。それは“gauntlet”の「元々の意味」とその語が呼び起こす「イメジ(頭に浮かんでくる画像)」である。つまり、

原文でこの表現が使われている意図は、Lynde 夫人宅の前を通る者は例外なく「笞刑」のムチで打たれるような厳しい視線を覚悟しなければならない、という<喩え>であり、読者はこれを視覚的に捉えることが期待されているはずなのだ。

さらに、ここに組み込まれたもう一つの表現“all-seeing eye”に注目していただきたい。これは、あらゆるものを見通す「神の全能の目」(all-seeing eye of God)、「プロビデンス (摂理) の目」(Eye of Providence)ともよばれるもので、キリスト教文化圏では古くからアイコン (icon, 図像) として捉えられてきた。アメリカの1ドル札の裏面にデザインされたピラミッド尖端の一目がそれである。この目は、必ず三角形 (キリスト教の三位一体を示すとされる) の内部に描かれる。この表現の直前、Avonlea が St. Lawrence 湾に「三角形に突き出た半島」(triangular peninsula) のほとんどを占めているとある。「三角形の」Avonlea の町中を見透かす Lynde 夫人の「神のごとき目」というわけである。「三角形」のアナロジー (analogy, 連想) を楽しむことのできる憎い仕掛けであろう。



1ドル札の“Eye of Providence”⁵

詮索好きなおばさんのご近所さんへの鶉の目鷹の目を「神の目」に喩え、玄関先を通る通行人が晒されるその厳しい視線を「笞刑」のムチに喩えるというなんとも大袈裟な比喩となっているわけである。喩えられるもの (Rachel の注視) を大仰な表現で喩える (「神の目」と「笞」) この修辞は「誇張法」(hyperbole) と呼ばれるものだが、喩えるものと喩えられるものとのこの落差が可笑しみを生む。そして、ほどなくここに連れてこられる運命のわれらが赤毛の主人公も、この目とムチに晒されるのだろうかと思ひ遣り、可笑しさのなかに予め不憚な気持ちを抱くのである。(しかし、その後読者のこの心配は、全く「小川のようにヤワではない」この少女によって裏切られることになるのだが。) ここでこのようなユーモアの効果が生まれるのは、“gauntlet” と “all-seeing eye” の字義通りの意味 (翻訳はそれを日本語にすることができ

ない) が喚起する視覚的イメージがあってこそなのだ。

おわりに

本稿は、原文に向かわなければわからない魅力を説明するために、翻訳の無力さをあげつらうかのごとき手法をとってきた。しかし、だからと言って、筆者には翻訳というものの存在意義を否定する意図は毛頭ないことを断っておかなければならない。筆者自身翻訳文学に大きく依存してこれまでの人生を生きてきた。翻訳なしでは日本の文化は今日のように構築されてこなかったことも重々承知している。しかし、翻訳は「万能」ではないということも、残念ながら認めなければならない。

翻訳は、総じて「大きく」原文の意味を写し取ってくれるし、優れた翻訳は「精緻な」レベルで原作の本質に迫るものだ。しかし、それでもなお、必ず「訳しきれない」ものが残るのである。ことばの壁を乗り越えようとする翻訳の偉業を讃えつつ、壁の向こう側に翻訳が残してきたものを見つけに行ってみよう。優れた翻訳者たちがどんなに頑張っても持ってこられなかったものの中には、言語のユニークな（だからこそ異言語に置き換えられない）豊かさが隠されている。その宝を探すと、それが放つ美しい光に陶然となること、それが原文を読むことの楽しみなのだ。そしてそれは、英語を学んでいる者に与えられた素晴らしい特権の一つなのである。

注

1. 本稿は、2015年度大妻女子大学文学部英文学科1年生対象の必修科目「基礎セミナー1」において筆者が行った講義に基づいている。
2. 原文は、L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* (London: Puffin Books, 2008) による。また、本稿のために参照したのは以下の9種類の翻訳である。
村岡花子訳『赤毛のアン』（新潮文庫、1952年）
中村佐喜子訳『赤毛のアン』（角川文庫、1957年）
岸田裕子訳『赤毛のアン』（学習研究社、1969年）
茅野美ど里訳『赤毛のアン』（偕成社、1987年）
松本侑子訳『赤毛のアン』（集英社文庫、1993年）
山本史郎訳『完全版・赤毛のアン』（原書房、1999年）
掛川恭子訳『赤毛のアン』（講談社文庫、2005年）
村岡花子訳・村岡美枝改定訳『赤毛のアン』（新潮文庫、2008年）

柴田元幸訳(冒頭部分のみ)『書き出し「世界文学全集」』(河出書房新社, 2013年)

3. 本稿で言及する修辭的技法の用語については, 例えは次のような本をぜひ参照してほしい。M. H. Abrams and Geoffrey Galt Harpham, *A Glossary of Literary Terms*, Eleventh Edition (Boston: Wadsworth, 2014)。
4. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Running_the_gauntlet.jpg
5. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Dollarnote_siegel_hq.jpg